

西日本豪雨災害 広島支援に行きました

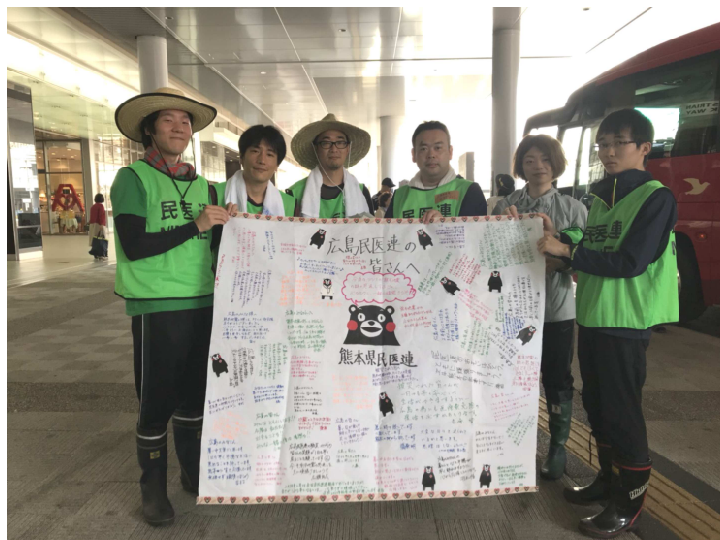
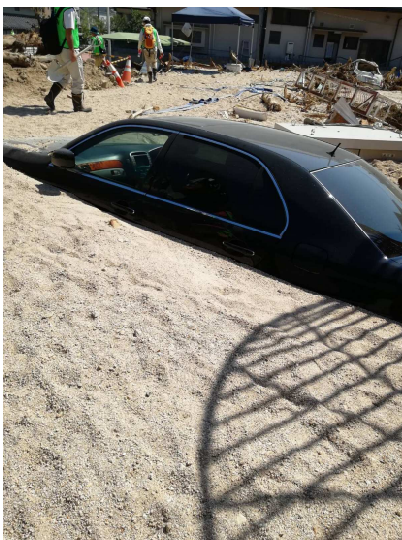
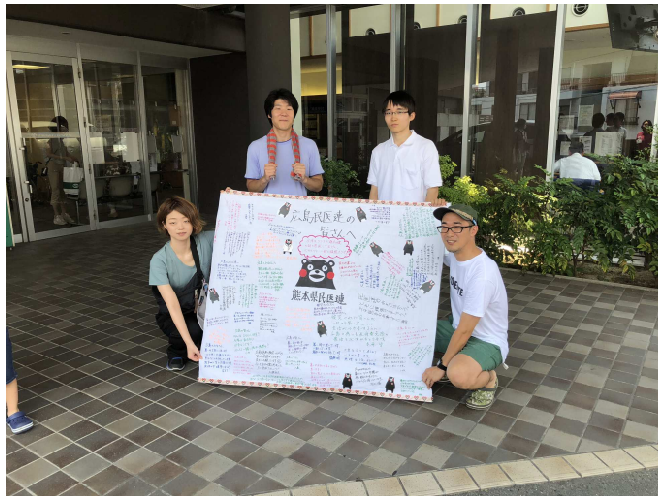
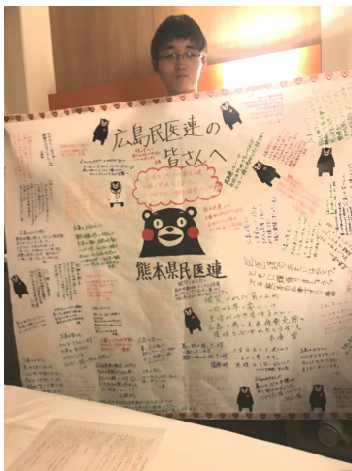
7月14日（土）に広島に到着して、翌15日（日）より坂町社会福祉協議会（ボランティアセンター）でボランティアと保険の登録をしたあとに民医連が支援活動する坂町小屋浦地区に入りました。地区では小学校が避難所、ボランティア窓口、救護所となっていました。校庭は災害ゴミ置き場となっていて、悪臭が漂い、粉塵が舞っているなか、電気、水道はストップ（15日の午後には水道は一部復旧）さらに35度を超える猛暑という環境でした。小学校で最終装備を整え、自治会長に案内されて支援する個人宅へ向かいましたが、道中至る所が流れてきた土砂で埋まり、土砂が乾いてサラサラした砂で砂浜を歩いているようでした。1日目の作業は個人宅ガレージよりゴミと土砂を出す作業、2日目は家中とガレージより家具や電化製品と土砂を出す作業でした。熱中症には特に気を付けて休憩時には水分とアメをこまめに摂取していても、猛暑の中では休んでいても私たちの体力を奪っていきました。そのような中でしたので支援活動に参加した5名が全員熱中症や怪我などなく無事にくわみず病院に帰り着いたときは達成感より安堵感の方が大きかったです。両日とも住民の方と会え、本当に感謝をしていただきましたが、被害は甚大で、短期間の支援ではなく長期間の支援が必要なのは間違いありません。民医連の職員としてライフラインが壊滅的な状況で、今夏の猛暑で生活しなくてはならない被災地住民を思うと疾病面での2次被害を防ぐため、早急に健康面での支援を期待します。水俣協立病院医事課 打上 努

現場を実際に見て、被害の大きさをあらためて実感し、少しでも被災者のためにという思いで作業に取り組みました。被災者の方から「来てくれてありがとう」と言葉をいただき逆に元気をもらいました。これからもできる支援を続けていきたいと思います。菊陽病院医事課 高橋 勇人

県連ニュース

発行者：木原 望

TEL : 096-387-2826
FAX : 096-381-5442

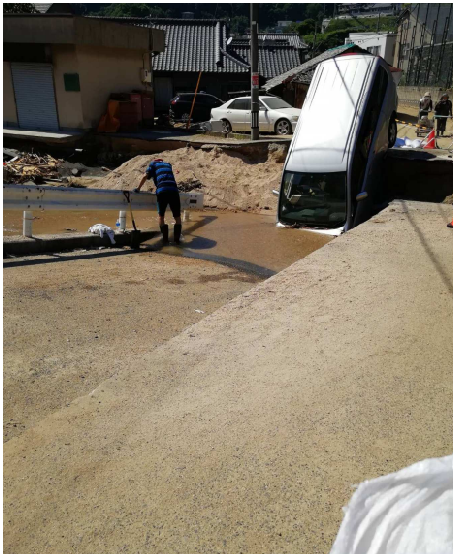
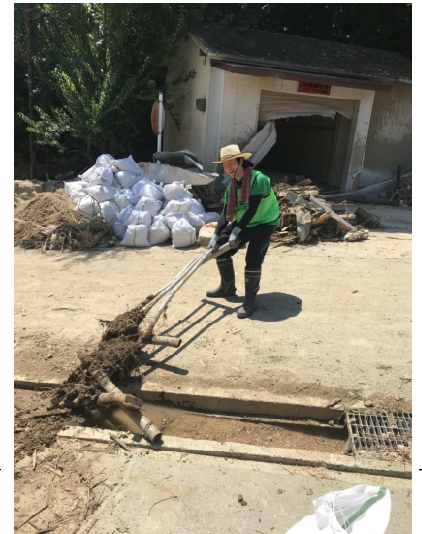


県連、本部、くわみず病院で急遽作成した、寄せ書きは無事に広島民医連に届けられました！

2年前の熊本地震で全国からの支援に助けられたこともあり、何より早く駆けつけねばという思いを持っている職員が多い中で、第一陣で参加させていただきました。支援に入った坂町の小屋浦という地域は、行政的にも支援が入るのが遅れた地域だったとのこと。物凄い量の土砂で車やがれきが押し流されており、家も倒れたり1階部分が埋もれているなど大変な被害でした。泥かき支援に向かう途中に、ご夫婦のご遺体が発見されたという民家があり、黙祷をしてから支援のポイントに向かいました。支援の内容は民家の泥かきで、炎天下で熱中症予防のために短時間しか作業ができず、なかなか目に見えて片付けが進まないもどかしさを感じた2日間でしたが、初日に現地の方が声を詰まらせながら「来てくれてありがとう。民医連がきてくれたと周りにも伝えておく。」と言われ、2年前、支援を受ける側だった時に支援者を感じた言葉にならない感謝の気持ちが思い起されました。被災地に何かしたいという気持ちがあっても「役に立たないのではないかと」参加を躊躇してしまう人がいるかもしれませんが、行くことそれ自体が被災地を励ますことは間違いありません。また直接支援に行かなくても、支援者を送り出している間、自職場を守ることも重要な支援です。これから長期にわたって負荷がかかり続けるであろう被災地に、息長く寄り添うことが求められていると思います。くわみず病院医局事務 安達止揚吾

被災地支援の話が来てからすぐに「行きたい」という意思を伝え、第1陣として被災地に向かえたこと、ほんの少しではあったものの、熊本地震のときの恩返しができたこと、不謹慎かもしれませんが嬉しく思いました。だれひとり体調を崩すことなく帰って来られたこともよかったと思います。忙しい最中、5人を熊本から送り出してくれた各事業所の方々に感謝したいです。熊本県民医連全体でできた支援だったと思います。

さくら薬局薬剤師 檜原 龍輝



坂町小屋浦で、2日間災害ボランティアとして支援を行いました。国道31号線が不通となり、開通して2～3日であったため土砂や流木などが町を埋めつくしている状態でしたが、なかなか作業が進まず、もう少ししたいという想いとは裏腹に、帰らなければならなくなった時はジレンマも感じました。復旧には相当な時間と力が必要です。少しでも早く平穏な生活に戻れるように出来る支援を続けたいと思います。くわみず病院薬局 松本莉穂